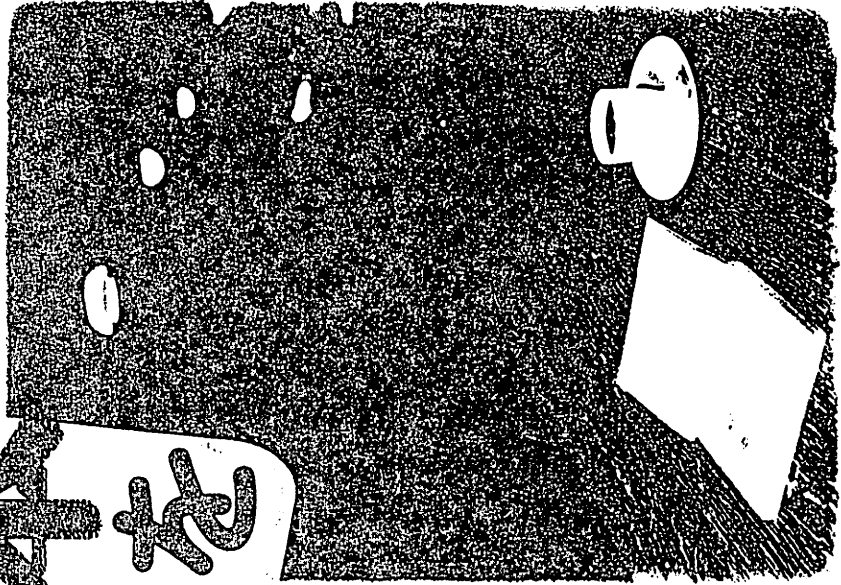


1946年8月26日第3種郵便物認可 2000年5月1日発行 (毎月1回1日発行)

# 別冊 世界 SEKAI

# この本を 読もう！

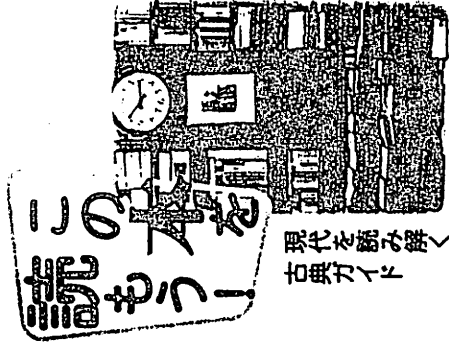
現代を読み解くための **図典** ガイド



## 別冊 世界 SEKAI この本を読もう！ 現代を読み解くための 図典ガイド

岩波書店

1946年8月26日第3種郵便物認可  
2000年5月1日発行 (毎月1回1日発行)  
©岩波書店 2000年 本誌掲載の記事は無断転載をお断りします  
編集・発行：岩波 原 印刷所：凸版印刷株式会社  
発行所：〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 (株)岩波書店  
電話：03(6210)4141 FAX：03(6210)4144 (本社編集部)



現代を読み解くための  
図典ガイド

- |         |       |
|---------|-------|
| 多田智満子   | 佐藤 学  |
| 佐野真一    | 山之内靖  |
| 紅野謙介    | 加藤哲郎  |
| 田口久美子   | 吉見俊哉  |
| ベニルケルマン | 内田隆三  |
| 津野海太郎   | 天野正子  |
| 黒田洋一郎   | 船橋洋一  |
| 柴田鉄治    | 斎藤貴男  |
| 松井孝典    | 木田元   |
| 石田晴久    | 熊野純彦  |
| 小出昭一郎   | 姜尚中   |
| 新妻昭夫    | 成田龍一  |
| 山田広昭    | 三浦信孝  |
| 斎藤 孝    | 栗原 彬  |
| 渡辺保史    | 村井 紀  |
| 間宮陽介    | 富山 一郎 |
| 神野直彦    | 岩崎 稔  |
| 桜井哲夫    | 永井 均  |
| 石川真澄    | 板垣雄三  |
| 石田英敏    | 長崎 暢子 |
| 小森陽一    | 藤井省三  |
| 鶴 銅 哲   | 大澤真幸  |
| 中村達也    | 鎌田東二  |
| 広井良典    | 池内 紀  |
|         | 鼓 直   |
|         | 沼野充義  |

世界 第675号 2000年 5月  
定価1000円 (本体952円) (送料92円)  
雑誌 05502-05 ISSN0582-4592 Printed in Japan  
T1105502051006

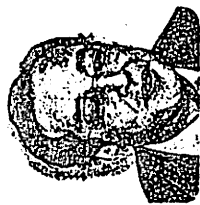
岩波書店「世界」編集部編 第675号

# 社会主義



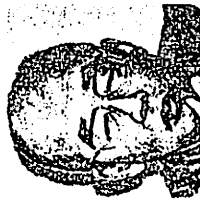
人間の物象化からの解放を目指したマルクス主義は、人間が国家に隷属する国家社会主義の悲劇を生んだ。現代社会の中で苦しむ人間の連帯はどこにあるのか？

## 加藤哲郎

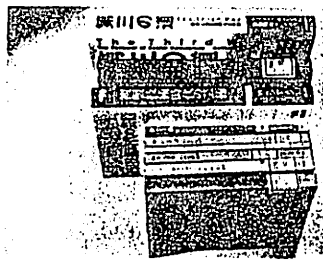


1947年生まれ。一橋大学社会学部教授。政治学、社会主義史。『東欧革命と社会主義』、『国民国家のエルゴロギー』

## 山之内靖



1933年生まれ。フェリス学院大学教授。社会思想史、システム社会の現代的相関「日本」の社会科学とフェーバー体制



## 思想としてのマルクス主義の誕生——一九世紀の社会主義

加藤 社会主義には、一八二〇年代の初期社会主義の誕生から一九一四年の第一次世界大戦までの思想・運動としての社会主義の段階と、第一次世界大戦、ロシア革命を経て成立し現存して崩壊した国家体制としての社会主義という、二つの段階があったと思います。大学の政治学の講義で、一九八五年から社会主義、民主主義、資本主義、自由主義、共産主義、全体主義という六つのイデオロギーに対する意識調査をしています。八九年の東欧革命、ベルリンの壁崩壊、九一年ソ連崩壊を契機に「社会主義がよい」という回答は激減しました。九九年は「よい」二%、「よくない」二七%ですが、「時と場合による」という学生がまだ六三%もいます。他の回答とあわせて分析すると、学生たちは、社会主義の理念・理想にはそれなりの意味づけを与えますが、社会主義体制・国家に対してはノーという回答を明確に示します。

では、前期の思想・運動としての社会主義とはどういうものであったか？ その手がかりを与えてくれるのは、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』でしょう。それまでの、空想的社会主義と呼ばれるロバート・オーエン、サンシモン、フーリエらは、フランス革命の「自由・平等・友愛」の系譜から、資本主義的な自由競争や所有権の自由に平等主義的・友愛主義的エトピアを対置し、財産共同体を構想しました。『共産党宣言』

は、七命ドイツ人を中心とした政治結社「共産主義者同盟」の綱領として、一八四八年革命の前夜に書かれ、私的所有の廃絶と「万国の労働者団結せよ」を明確に主張し、その後の第一インターナショナルから第二インターへの労働運動の勃興に伴って普及し、大きなイデオロギイ的影響力を持ちました。

そこには資本主義世界を洞察した鋭利な分析が含まれています。その文体やリズムにも理想社会を目指したパッションが感じられて、私自身も、学生時代に社会主義・共産主義思想に触れるきっかけとなりました。今日でも、社会主義入門の書として意味をもつでしょう。

第一章「ブルジョアとプロレタリア」は、階級闘争史として書かれています。ブルジョアジーの生成を、近代から近代社会への生産力の世界史的展開、資本主義が国境を越え、人間生活の隅々にまで入り込んでいく過程として、生き生きと叙述しています。かつてステイブン・ハイマーは、ここでの「ブルジョアジー」を「多国籍企業」と置き換えて読むと、現代の多国籍企業の最もダイナミックな描写になると述べたほどです。

日本にも『共産党宣言』を通して社会主義思想が入り、戦前河上肇の『貧乏物語』や『第二貧乏物語』がベストセラーになったことから分かるように、当時の日本社会に即した切実な読み方をされ、社会主義・共産主義への希望をかき立てました。しかし、私のような戦後生まれの団塊の世代になると、『宣言』の資本主義の発展

メカニズムには共感できても、ブルジョアジーの対極で増大し窮乏化するという「プロレタリアート」とその「党」を主体として社会主義に引きつけていく力は、なくなっていました。そこで我々は、『ドイツ・イデオロギー』（一八四五―六）の「交通形態としての市民社会」や、『経済学・哲学草稿』（一八四四、以下『経哲草稿』）の「疎外された労働」の理論を参照して、新しい社会主義を構想しました。私自身は、『ドイツ・イデオロギー』の「幻想共同体としての国家」や『フランスの内乱』（一八七二）の「国家の社会による再吸収」の発想から、ロシア革命を経てレーニン主義に引き継がれた国家観とは異なる文脈を見出して、『共産党宣言』の「ブルジョア階級の共同委員会」という規定では満足できないマルクス主義国家論を再構築しようと思いました。こうした意味では、いかに社会主義が読まれてきたかという問題を考える際に、今日でも『共産党宣言』は通過しなければならない、あるいは批判的に通過することによって何かを得られる一冊となりうると思います。

山之内 六〇年代末から七〇年代にかけてベトナム戦争や文化大革命や大学紛争があつて、それまで構築してきたマルクスについての理解を大きく揺るがす状況にぶつかつたとき、私が格闘した文献は、『経哲草稿』と『資本論』でした。

長い間埋もれていた『経哲草稿』は一九三三年に発見されました。それは四つのパートからなっていますが、

マルクス・エンゲルス  
共産党宣言  
岩波文庫(大内兵衛、向坂逸郎・訳) 1971年 116頁 300円  
新日本文庫 1989年 180頁 524円  
大月書店(村田鶴一・編訳) 1983年 104頁 1200円

マルクス・エンゲルス  
ドイツ・イデオロギー  
新日本出版社 1988年 4900円  
合同出版(花崎松平・訳) 1992年 238頁 1359円  
河山哲房新社(飯松渉・訳) 1974年 169頁 6476円

マルクス(城塚豊、田中吉六・訳)  
経済学・哲学草稿  
岩波文庫 1964年 312頁 588円

マルクス  
フランスの内乱  
岩波文庫(木下半治・訳) 1952年 334頁(品切)

私が注目したいのは第三草稿です。一般によく知られているのは「疎外された労働」を論じた第一草稿です。しかし、第三草稿でマルクスの認識は大きく転換しました。近代社会は宗教改革で生まれた新しい精神を通して形成されたとする観点に、マルクスはこの第三草稿で初めて到達しました。この観点は後のマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のそれと、大幅に重なっています。この観点に立つてマルクスは、アダム・スミスの『国富論』に新しい意味を読み取り、ヘーゲルの『精神現象学』に、労働を通して自然を変えていく過程で人間もまた歴史的に変化するという、歴史的弁証法の論理を読み取ります。この時点のマルクスが、フョイエルバッハの『キリスト教の本質』から大きな影響を受けており、そこから疎外という論点を引き継いでいたことも重要です。

この第三草稿には、後の『資本論』(二八六七一—八九四年にかけて刊行)でその中心問題として提出された物象化論がすでに姿をあらわしています。この第三草稿の物象化論は、同じ頃にフリードリッヒ・エンゲルスが『国民経済学批判大綱』で論じていた筋道とはまったく異なっており、実際にはエンゲルス吟味と言ふべきものとなっています。エンゲルスが批判の対象としたのは、共同体間の価格差を通じて搾取するタイプの前近代的商業資本であり、其金原を富の本質とする物神崇拜性Ⅱ物象化であったのに対し、マルクスは重商主義的な富の認識を

超えたところにスミス『国富論』の意味があると捉えたうえで、労働のもつ富形成の可能性こそが人間存在の物化をもたらすとしています。この観点からすると、マルクスは労働価値説の支持者ではなく、むしろその批判者だと言わねばならないでしょう。

『資本論』の中の労働過程論で、マルクスは人間の労働と動物の活動との意味の違いを比較し、蜘蛛の巣作りと大工の家作りとの違いに言及しています。人間の場合、労働を始める前に自分がつくろうとするものについて予めイメージを持つ。先に観念があつて、観念に即して物をつくるのが人間労働の意味なのです。そこに自由があります。この観点からすれば、階級支配とは、この人間の構想力を資本が搾取することだということになります。労働者はまるで蜘蛛が巣作りをするような、機械的な作業しか許されない。よくマルクスは唯物論者だと言われますが、実は唯物論と観念論の二項対立を超えたところで構想していたのだと思います。

だが、ここに落とし穴があることも、考えなくてはならない。人間のもっている構想力は、果たして無限に自由なのでしょうか？ 人間の構想力が過剰に評価されるとどうなるのか？ そこからは、テクノロジーの支配という新たな抑圧が登場してくる。それはまた二〇世紀社会主義の問題性を産み落としているのでしょうか。

### ソ連社会主義と社会民主主義の展開——二〇世紀の社会主義

ルクスを読むことに気づいたのです。

伝統社会では、国王の権力を宗教が補完する形で社会的秩序に正当性が与えられました。これに対し、近代社会では自立した市民の一人ひとりが倫理的な主体として行為すると前提され、国家に先立つ市民社会のレヴェルで社会秩序が形成されると主張されました。自立的な個人のあいだで取り結ばれる理念は、フランス革命の自由・平等・友爱であり、ベンサム功利主義原理でした。そうした倫理性こそが、思わざる結果として、数量的に還元される非人格的で匿名的な力の支配を生んでしまうというのが物象化論の中心命題です。

そのことをマルクスは、貨幣を媒介として形成される富の市場的交換関係に基礎づけて理解したのに対して、ヴェーバーは、法による匿名的で抽象的な支配に注目しました。彼は『支配の社会学』の冒頭論文で、合法的支配、伝統的支配、カリスマ的支配を論じ、この三つを支配の正当性原理だとしています。合法的支配は民主的な社会においてなおかつ不可避免的に成立する支配です。近代社会では、市民のなかから代表が選抜されて議会を構成し、議会において法がつくられる。この法が国家の政治的秩序の内容を提議し、その政策内容に忠実に行政官僚が市民を統御していく。しかし、この民主制の下でも、職業が複雑多岐に分化し、企業、自治体、裁判所、病院、大学と、専門領域ごとに集団が形成され、集団の内部に専門家による支配と階層化、つまり官僚制支配が

加藤 六八年の学生運動、ベトナム戦争、中国文化大革命、チエコのプラハの春、フランスやイタリアでの労働運動高揚、といった世界的な激動に直面し、私たちは、『共産党宣言』『資本論』などマルクスのテキストから、ソ連型のマルクスレーニン主義へと体系化されたものとは違った解釈や文脈を見出し、マルクスの失われた視座を発掘しようとしてきました。例えば『経哲草稿』第三草稿の「自然主義Ⅱ人間主義」の発想を手がかりに、人間と自然との根源的な関係を問い直して、そのうえで疎外論や物象化論のマルクスを重ね合わせようとしてきました。

しかしながら、私たちの世代は、「だからマルクスは生きている」という話では満足できず、マルクスに学びつつマルクスをいかに超えるかというスタンスが生まれました。マルクスが見ることができなかった現実をマルクスの問題意識や発想を借りながら分析し、新しい社会主義を構想したのです。平田清明『市民社会と社会主義』(一九六九年)などは、その流れで読まれました。

山之内『資本論』を物象化論を中心に据えて読むことを最初に主張したのはハンガリー生まれの思想家・ルカーチでした。彼の『歴史と階級意識』(一九二二年)の中に「物象化とプロレタリアートの意識」という論文があり、マルクスの物象化論とマックス・ヴェーバーの合理化論・官僚制論を対にして論じています。第一次大戦という人類史上塗方もない悲惨な経験を経過して初めて、ルカーチは階級問題からではなく、物象化論からマ

エンゲルス・編(坂垣逸郎・訳)  
マルクス 資本論 全9冊  
岩波文庫 1969—1970年 660円—860円  
ほかに、新日本出版(資本論編訳委員会・訳)  
国民文庫(岡崎次郎・訳)などがある

マックス・ヴェーバー(大塚久雄・訳)  
プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神  
岩波文庫 1989年 412頁 800円

フョイエルバッハ(船山暎一・訳)  
キリスト教の本質 全2冊  
岩波文庫 1939年 (品切)

平田清明  
市民社会と社会主義  
岩波書店 1969年 354頁 (品切)

生まれてくることは避けられないと言うのです。

ヴェーバーは、一九一八年、魏ーンで海軍の将校団に呼ばれて時局講演（社会主義）を行いました。この講演でヴェーバーは、資本と生産手段の社会的所有なし国国有化を実現していけば人間による人間の支配はなくなるとマルクス主義者は言うが、実はそうはならないと主張します。社会主義になればむしろ官僚制の全面化が現れ、一部の国家官僚が全面的に統制する合理的支配の極限的なシステムが現れてくるというのです。

一方でヴェーバーは、ドイツ社会民主主義の発展の中で、ベルンシュタイン、カウツキー、ヒルファアディンクらによつて担われる新しい時代の社会主義思想が成熟してきているのであり、一九一七年一〇月のロシア革命と、その結果としての全面的な党官僚制支配は長続きしないと考えていました。しかし、他方では、アメリカも第一次世界大戦に参戦することによつて、古い名望家的支配の段階を急速に超えていき、専門家による官僚行政へと全面的に転換しつつあると観察していました。

そうした時代状況のなかで、ルカーチはヴェーバーのテーゼを受け止め、ヴェーバーの官僚制論をモデルとしながらマルクスの商品論を読み取っていきます。しかし、問題なのは、物象化という問題を鋭く読み取ってきたがゆえに、ルカーチは却つて、これを超えていく可能性は労働者の日常的意識と実践のなかからは生まれてこないというペシニズムに陥ってしまったということだ

す。その結果、ルカーチはレーニンの党の支配の絶対化を結論づけました。実はヴェーバー自身も同じように困難な問題状況に行き当たっていました。ヴェーバーは、合法的支配の窮境を脱却し、感情的モメントを取り戻すためには、カリスマによる指導者民主制が期待されるをえないという展望を晩年に下すことになりました。第一次大戦後の社会科学が直面した問題を要約すれば、ルカーチとヴェーバーが抱え込んでしまったこの悲劇からどのようにしたら脱却できるかという模索の過程にはほかならなかったと思われま

加藤 『共產党宣言』の影響で労働運動が生まれて二〇世紀初頭に到ると、第一インターナショナルの中心であったドイツ社会民主党の流れと、ロシアのレーニン主義、後の第三インターの流れという、大きく二つの社会主義の流れが生まれました。

前者の第二インターの流れは、直接ヴェーバーが批判の対象にしたものですが、代表的な著作として、ベルンシュタインの『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』(一九〇九年)があり、第二次大戦後にケインズ主義と結びついて福祉国家を構成する社会民主主義のあり方を方向づけました。それは、レーニン主義や第三インターの系列からは、資本主義の体制内にとどまる修正主義・改良主義として軽蔑されましたが、労働者の権利拡大、社会福祉の充実を実現して、今日EJ加盟一五カ国中一三カ国で政権与党となる、社会主義の有力な現実主

G・ルカーチ  
歴史と階級意識  
白水社(城塚登、吉田光・訳) 1991年 564頁 3107円  
未来社(平井俊彦・訳) 1987年 357頁 2800円

マックス・ウェーバー(漢島朗・訳解説)  
社会主義  
講談社学術文庫 1980年 124頁 540円

義的潮流となりました。

ただそれは、一九世紀の思想・運動としての社会主義がもっていたユートピア性とかかわりだいでいうと、個々の労働者が生産者であると同時に市民・国民となり、消費者でもあり株主でもあったりする、いわゆる重層的メンバーシップの現実を否認することになり、マルクスにおいて変革主体として想定されていたプロレタリアートの性格は薄れていきます。労働者の同権化、市民社会への参入が、むしろ社会主義思想を希釈します。

後者のレーニン主義を代表する著作は、レーニンの『国家と革命』『帝国内政』(一九一七年)などですが、ここではプロレタリア独裁のもとでのプロレタリア民主主義という形で、誰でも政治に加わり権力を動かすことができ、それによつて国家を死滅させていくというユートピア的な発想が含まれていました。しかし、レーニンのオブタイニズムは現実によつて裏切られ、一党独裁と官僚制化が進行し、ロシア型の革命は、資本主義が成熟した国々ではなくて後進国へと広がり、発展途上国の開発独裁のモデルとして引き継がれていきます。

これら二つの系列とも、当初はインターナショナルイズムとして出発しますが、ソ連の場合は一國社会主義建設を余儀なくされ、ドイツ社会民主党の場合は第一次大戦を契機に祖国擁護を掲げて自国の労働者階級の利益代表となります。

ヴェーバーの社会主義論では、人に対する物の支配、

全般的官僚制化の問題と共に、社会主義の国民国家化、労働者階級の国民化という問題も指摘されていて、一九世紀社会主義の理念がもっていたユートピア性の喪失を見とおすものでした。

### 社会変革の可能性—グローバル化の中の社会主義

加藤 こうした流れに対し、二〇世紀の後半に、社会主義の魅力アカデミズムと社会運動に残し、喚起することができたのは、アントニオ・グラムシの思想ではないかと、私は考えます。グラムシの著作は、日本ではまだ完全な翻訳はありません。一冊にしぼるとすれば、かつて青木文庫版があり、最近上村忠男さんの翻訳で新編が出された『現代の君主』という書物でしょう。これは、グラムシがイタリア・ファシズムとの闘争のなかで逮捕された時期の獄中ノートを編集したもので、『奴隷の言葉』で書かれていて論理の体系性はありませんが、そのことが逆に、社会主義思想の多様な発展の可能性を示唆していると思います。

グラムシが知られるようになったのは、戦後にトリアッチらがイタリア共産党創始者の一人としてグラムシを回顧したことがきっかけで、日本にも一九五〇年代後半に入ってきました。国家体制となった社会主義の硬直性、一党支配に行き詰まりを見いだした私は、『奴隷の革命』(『資本論』)に『国家と革命』を翻訳して、『注目』しました。

E・ベルンシュタイン(佐瀬昌盛・訳)  
社会主義の諸前提と社会民主主義の任務  
ダイヤモンド社 1974年 440頁(品切)

230頁  
1965年

新訳  
基礎  
全編刊行  
1957年(品切)

方では国家がすべてであり、市民社会は原生的でセラチン状であった。西方では国家と市民社会とのあいだに適正な関係があり、国家がぐらつくるとたちまち市民社会の頑丈な構造が姿をみせた。即ち、当時国家独占資本主義と呼ばれていた戦後西側世界の資本主義システムに対し、レーニンの帝国主義論のような切り口ではない、新しい資本主義理解の手がかりがあると思つたのです。ここから「機動戦と陣地戦」と定式化されるような、レーニン時代の機動的な変革のあり方ではなく、強固な市民社会に即した陣地戦・野戦戦風の変革のあり方、先進国革命論が模索されました。

さらにグラムシは、国家を「政治社会プラス市民社会、強制の鎧をつけたヘゲモニー」として、強制の契機ばかりではなくて同意の契機をみて、同意を調達する知的道徳的力能を「ヘゲモニー」と表現し、「政治社会を市民社会のなかに吸収する」構想を示して、マルクス「フランスの内乱」の「国家の社会による再吸収」の思想を再興します。ソ連や東欧の社会主義が魅力を失った八〇年代から九〇年代になると、グラムシの実践の哲学、市民社会論、受動的革命論、有機的知識人論から、世界システム論、レギュレーション理論、イデオロギー表置論、言説理論などを経て、今日のカルチュラル・スタディーズやサバルタン(下層弱民)・スタディーズに流れるような、文化・道徳・倫理の思想家としてのグラムシが再発見されていきます。先に引いた文章のあとに、

グラムシは、「国家は第一線野戦にすぎず、その後ろには要塞と砲台の頑丈な連鎖が控えていた。これには国家によって多少の違いがあった。このことがまさしく、国民的性格をおびた正確な偵察を要求していた」と述べますが、これは機動戦・陣地戦から、さらに現代の情報戦への展開を示唆しているように読めます。

こういった新しい思想的流れを、私はネオ・マルクス主義、ネオ・グラムシズムとして肯定的に評価しています。しかしグラムシにも歴史的限界があります。さまざまな媒介的・重層的思考をしながらも、複雑化した社会統合の中心を、最終的には「現代の君主」としての政党におきます。その意味では全体的思考を抜け出していないという批判もあります。

山之内 新しい社会主義の展望を探る上でどうしても考えておかなければならないのは、メディア技術の新たな水準と深く関わりながら、ファシズムが登場してきたという問題です。ウルター・ベンヤミンは一九三六年に『複製技術時代の芸術作品』という論文を発表しますが、これはメディア論の領域でファシズムと対決しようとした記念碑的な文章です。第二次世界大戦後、電話・電信・映画など、まったく新しい情報伝達技術や表現技術が登場してきます。伝統的な世界で美学的に意味をもってきた個性的で一回限りの絵画・彫刻・建築物は、複製技術を通して簡単に大衆社会のなかに受容され、その結果、伝統を支えていたアウラが消失し、激しいニヒリ

レーニン(宇野浩二編・訳)  
帝国主義 1956年 241頁 600円  
岩波文庫

アントニオ・グラムシ(上村忠男・編)  
新編 現代の君主  
青木書店 1994年 328頁 3200円

ズムが現れる。ベンヤミンは、このニヒリズムによる心理的喪失感を補償するものとしてウルトラ・ナショナリズムという「政治の職業主義」をもたててきたもの、それをファシズムだととらえています。

加藤 グラムシが対抗していたのは、一九二〇年代から三〇年代のイタリア・ファシズムであり、「アメリカニズムとフォティズム」という論文にあるように、大量生産・大量消費に向かう資本主義でした。その現実認識・変革主体認識には歴史的制約がありました。その意味では、六八年以後のいわゆる「新しい社会運動」が目されます。従来のマルクス主義では、生産力の発展は「必然の国から自由の国へ」の解放の絶対的契機でしたが、そうではなく、生産力そのものに疑問を持ち、物質的価値よりも脱物質的価値にある種の解放の契機を見いだす思想であり、従来型の政党・労働組合ではなく、市民運動や国境を越えたNGO・NPOの運動として展開していく流れです。これは、初期マルクス「経哲草稿」の「自然主義＝人間主義」や「ドイツ・イデオロギー」の「交通形態」という発想を受け継ぐものと言えます。

その意味で、グラムシはフォティズムからアフター・フォティズムへ、陣地戦・野戦戦から情報戦・言説戦への流れは展開できませんでしたが、その方向を示唆していました。それを今、カルチュラル・スタディーズやサバルタン・スタディーズの人たちがくみ上げています。エコロジ、フェミニズムやポスト・コロニアルと

いった潮流は、一九世紀に現実批判のユートピアとして生まれた社会主義の、思想的継承者なのだと思います。

山之内 新しい社会主義の可能性という観点から、現代の正し諸国で語られている「第三の道」を考えてみましょう。アンソニー・ギデンスは、グローバル化のなかでケインズ主義的な福祉国家は財政危機に陥ったが、それに代わるものとして登場したレーガン・サッチャー流の新保守主義に委ね、市場の合理性に全面的に依拠すれば社会は破綻をきたす。そこで「第三の道」が必要だとします。ギデンスが強調するのは教育の重要性です。では教育を通して何が要求されているかといえは、若年層から高齢者層まで含めて、新しい時代の技術に対応していく職業能力習得のチャンスを与えていくために国家が積極的な役割を果たせというものです。ここでは人的資本への投資のみが強調され、近代以来よしとされてきた教育の性格を根本から吟味し直すという思考が抜け落ちていきます。この筋道は、大枠としては現状を超えるものではなく、グローバル化していく時代の病理現象に正面から取り組む方向にはなっていない。

加藤 「第三の道」論のように、社会主義を体制や国家に制度化するのではなく、現実世界に対する批判的な思考と、そこを突き抜けて何かをつくり出していくという社会運動こそが、社会主義思想のもっていたユートピアの延長上にあります。おそらくそうした方向でしか、社会主義は二世紀に生き残れないでしょう。

ウルター・ベンヤミン(佐々木通一・編)  
複製技術時代の芸術 畠文社クラシックス  
品文社 1999年 187頁 1900円  
ベンヤミン・コレクシヨンI(浅井健二郎・編訳)  
ちくま学芸文庫 1995年 688頁 1529円

アンソニー・ギデンス(佐和隆光・訳)  
第三の道 効率と公正の新たな同盟  
日本経済新聞社出版局 1999年 285頁 1500円